広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スピリチュアリティの学際的研究 ： 近代科学パラダイム批判とグローバル教育への示唆
Auther(s)	恒松，直美
Citation	総合学術学会誌 , 7 : 29 - 36
Issue Date	2008
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040626
Right	Copyright (c) 日本総合学術学会
Relation	

スピリチュアリティの学際的研究
—近代科学パラダイム批判とグローバル教育への示唆—

Interdisciplinary Study on Spirituality
Critical View on the Modern Scientific Paradigm and Suggestion for Global Education

総合学術学会誌
Journal of Society for Interdisciplinary Science
第7号　**Vol. 7**

日本総合学術学会
Japan Society for Interdisciplinary Science
2008年

恒松　直美（広島大学）

TSUNEMATSU Naomi (International Student Center, Hiroshima University)

スピリチュアリティの学際的研究:
—近代科学パラダイム批判とグローバル教育への示唆—
Interdisciplinary Study on Spirituality:
Critical View on the Modern Scientific Paradigm and Suggestion for Global Education

恒松直美 (広島大学)
Naomi Tsunematsu (International Student Center, Hiroshima University)

Abstract:
This paper examines the development of research on spirituality in various academic fields, by introducing the criticism on the modern scientific paradigm and the conventional knowledge construction, including the feminist theoretical perspectives. I shall also connect the research development on spirituality with the global education and attempt to search for the direction of global education in the future. Research on spirituality has been actively promoted in various academic fields including science and education, and interdisciplinary study on connectedness of matters and spirit seems to be an universal phenomenon today. Research on spirituality in various fields has significant implications for the development of global education.

Keywords: spirituality, connectedness, feminism, knowledge construction, global education

1．スピリチュアリティ研究の学際的研究の発展

本稿では、スピリチュアリティ(spirituality)の研究の発展の現状について、フェミニズム理論を含めた新しい知識構築パラダイムによる近代科学批判にも言及し、スピリチュアリティの概念が既存の研究にどう影響し、その研究が発展してきているかについて明らかにする。さらに、今日盛んに議論されているグローバル教育と学生のスピリチュアリティへの渇望とを関連付けながら、スピリチュアリティの重要性と今後のグローバル教育の方向性について探る。現在多分野で研究されているスピリチュアリティについて、近代科学主義、グローバリズム、フェミニズムの視点から改めて批評し直すことにより、現在求められている教育について再検討し、グローバル社会における教育のあり方への示唆としたい。

スピリチュアリティ及び意識(consciousness)[1]の研究は、心理学、哲学、宗教学、神学、教育、ビジネス、理論物理学、医学、認知科学、神経科学、行動科学、進化生物学、現象学など、幅広い分野で国際的に発展してきている。つまり、学際的に多様な分野で研究されており、連携もある。現在異文化間の相互依存やつながりを重視するグローバル教育が注目を集めているが、それはスピリチュアリティの学際的研究の発展と無関係ではない。

学生のスピリチュアリティの必要性については、例えば、アメリカの大学で大規模な調査が行われている。アメリカのカリフォルニア大学ロスアンゼルス校(UCLA)の高等教育研究所が、学部生のスピリチュアリティについて2004年に行った調査によると、自分のスピリチュアリティが無視されてきたと感じ、高等教育においてスピリチュアリティについてのサポートの必要性を求める学生が増加しているという(Higher Education Research Institute:2003)。[2]

---

[1]意識や心への科学的及び哲学的研究が発展してきており、21世紀は脳と心の研究が最大の科学的挑戦になるとも言われている(石川・渡辺: 2001: 82)。「意識」という用語を使用した場合、科学も含めた学術研究的に捉えられる傾向があるが、「スピリチュアリティ」という用語の場合、学術研究の域を超え、かなり多義に捉えられる傾向があると言えよう。本稿では、「意識」(consciousness)についての科学的研究の詳細については割愛した。

[2] 2003年に46大学に在籍する学部生3700人についてパイロット・スタディを行い、2004年に150大学の

まず、スピリチュアリティの重要性と定義について述べたい。'Spirituality'からきた「スピリチュアリティ」という言葉の、日本語とのそり合いの悪さからくる定訳の難しさを大宮司・村田(2003:160)は指摘している。 'Spirituality'について、例えば、Tisdell (2003: 28-30)は、「世界における人生の意味と目的探求、全体における他とのつながりや事象の流れにおける真の自己探求についての認識と自己実現」と定義している。また、Lindholm and Astin (2006: 1-2)は、スピリチュアリティへの目覚めによる、個人の潜在能力の発達や世界との関わりへの影響について論じている。変化として、他の人と共感し、市民としての責任感を持ち、倫理的行動をする使命感を持つようになるという。そして世界とのつながりを認識し、世界へ貢献したいという高邁な心を持つようになると述べている(De Souza: 2003; Astin, Astin, Lindholm, and Bryant: 2005; Harris and Moran: 1998) 。[3]

また、Bentz and Shapiro (1998)は、研究に従事する研究者にとってのスピリチュアリティの重要性を提示して、研究自体の意味を問い直す鋭い考察を行っている。つまり、研究におけるマインドフルな質問の持ち方('mindful inquiry')[4]の重要性を説き、研究と自己との密接な結びつきや、研究が自己変革をもたらす可能性について論じている。Bentz and Shapiro (1998: 6-7)によれば、研究内容は、自己を省みて、スピリチュアリティの育成に貢献する必要があると説く。さらに、Bentz and Shapiro (1998: 5)は、科学的方法は、必ずしも唯一の絶対的研究方法ではなく、ものごとを知る一つの研究方法にすぎないことを述べ(Belenky, Field, Clinchy, Goldberger, & Tarule, 1986)、他の研究方法と関連付けられる必要があると指摘する。

次に、スピリチュアリティの研究でも行われている学際的研究の意義について論じる。従来の西洋的近代科学パラダイムでは理解不可能な精神や意識についての解明において、多分野からの知識を融合した研究が試みられている。学際的研究への注目は、事象全体を包括的及び融合的に捉えることの重要性についての認識が高まっていることを意味すると言えよう。東洋哲学や、1960 年代以降発展してきたポストモダニズム、ポストコロニアリズム、フェミニズムなどの諸理論が新しい世界観を提示してきたこと（モーガン 2005: 60)に見られるように、主体と対象を批判的に分析し直す新しいパラダイム構築や、細分化せず全体を見る包括的な現実理解の発展などによる研究への影響は大きいと言えよう。

知識構築の方法と構築者の位置づけの問題として、例えば先住民の知識があげられる。例えば、モーガン(2005: 59-60)は、先住民が様々な知恵や知識を認知し、身体と精神を一体のものとして理解するシステムを生み出したことについて論じている。先住民の知識は、科学、宗教、哲学、精神的なものを融合させた実践であり、全体論的な存在論が認識され信頼を得たとモーガン(前掲)は論ずる。しかし、知識(knowledge)は科学的に確立した基盤を有するが、知恵(wisdom)は必ずしも科学的な基盤を明確に確立できていないとモーガン(2005: 50)は述べる。例えば、先住民の何千年にも亘る観察や経験を通して学んだ環境利用の方法は、「科学的」で文化的知識の百科事典として西洋の科学的知識に利用されてきたが、そのことはあまり認識されず、先住民の知識には高等教育における正当な学術的役割が与えられていない(モーガン: 2005 : 52, 63)。また、先住民は、支配的西洋パラダイムによって、西洋の知識を学習せざるを得ない環境におかれてきた。このような先住民の知識習得は、個と全体についての論議とも関連する。

90000 人の学部生について、調査を行った。

[3] 例えば、湯浅(2003)が、哲学、宗教、科学、医療を含めた多様な分野におけるスピリチュアリティ研究についてまとめている。「スピリチュアリティ」、「スピリチュアリズム」という言葉は多義に定義されており、例えば、「スピリチュアル」を一部「心霊主義」「霊媒主義」として捉えた議論(苫米地:2007)もあるが、これらの概念と、本稿でのスピリチュアリティの議論は、異なる事象を扱っていることを明確にしておく。「スピリチュアリティ」という用語の多面性とその使用の現状については、西平(2007: 71-90)、堀江(2007: 35-54)を参照。本稿では、科学も含め学術的に多分野で研究されてきたスピリチュアリティについて考察する。「スピリチュアリティ」の定義は、他に、Palmer (1998: 5)などを参照。

[4] 「マインドフル」('mindful')とは大変訳しにくい言葉である。例えば、中川(2005: 226)は、その名詞形である「マインドフルネス」について「マインドフルネスとは、自分の中心にとどまりながら、自分のなかに起こってくる感情のプロセスと同一化することなく、ただ感情の流れを観察していく方法である」と述べ、批判や判断、感情の抑圧などをせず、自然に感情の動きを見つめるプロセスであると説明している。

各細部と全体との関わりについての多面的研究は、科学も含め、多くの学問分野で現在見られる事象である。

異なる学問領域のつながりと、多面的手法による事象への理解は、複雑な事象を理解するには不可欠であるとの指摘もある。例えば、Spies (2000: 27-28)は、知識自体が学部組織や専門領域に細分化され、学習者は大学の専門分野によって分割され権威を重視する環境の中で、狭い学問分野でのみの機能的な専門家になるよう教育されていることについて懸念を表明している。進歩のためには、多分野での、専門分野に細分化された技術・理論・事実への集中的研究が必要であると同時に、全体像を把握するためには、学際的手法を用い全体を見ることが重要であるとSpies (2000: 28)とBauer (2001:2)は提唱する。

その必要性は、新しい世界観が複数の学術的分野や世界の様々な場所で同時に現れてくる興味深い現象(Wheatley: 2006: 157-158)においても明らかである。多くの学問分野が、異なる声で、ネットワーク、関係性の重要性、人生の包括的理解について敬意をもって考えることを提唱しているという。この現状の中、古典的パラダイムの見直しは複数の分野で行われている。例えば、Nadeau&Kafatos (1999: 198-199)は、物理学の古典的パラダイムが、実際に経済や政治的現実や人間システムについての理解とマネージメントに影響を与えてきたことを多くの学者が証明してきたと論評している。

2．フェミニズム理論による近代科学批判：意識と科学の研究の融合と知識構築

スピリチュアリティの重要性への着目と学際的研究への注目について議論した上で、近代科学批判の議論についてまとめておきたい。今日、意識と科学についての研究は、日々前進しており、科学に携わる研究者も多様な方向から研究に取り組んでいる。2007年8月に'Consciousness in Action'と題してアメリカで開催されたInstitute of Noetic Sciences(IONS)[5]の学会に参加する機会を得、意識・スピリチュアリティ・科学の最先端の研究について多様な分野から学ぶ機会を得た。

IONSは、個人と共同の変革のための意識と経験についての科学的研究を推進することを使命とし、認識・信念・意志・直観力等を含めた意識の可能性と効力について研究を行っている。[6] IONSについて注目すべきは、1) 因習的な科学的モデルにあてはまらない現象について探求し、なおかつ科学的論理に基づいた研究を行っていること、2) 多面的な研究方法による洞察に基づき、社会的及び科学的事象についての多様な見解を支持していく、と掲げていることである。

ここで'Integrative science' (統合科学)という言葉について紹介しておきたい。統合科学 についての論文で、Kafatos and Drãgãnescu (2007)は、'integrative science'という用語はKafatos (2000)により「現実の構造的かつ現象論的側面の両面を研究する科学」について与えられた名称であると述べている。Kafatos and Drãgãnescu (2007)によれば、'integrative science'は、質的及び量的側面から認識し、物質及び意識についての理論を結び、生命・心・意識の性質への理解を深めるものであるという。Kafatos and Drãgãnescu (前掲)は、意識と事象の関係と宇宙におけるその統合とつながりについての研究が発展し、多くの研究者に影響を与えていることを論じており、Rose (1999) の述べる、脳・心・意識の現実についての科学的説明は科学の最後のフロンティアであるとの見解を取り上げている。[7]

植民地主義や自民族中心主義が否定されたことで、「真理」の裁決者としての科学や科学的方法の信頼性が疑い始められたこと（モーガン: 2005: 53）は、科学の機械論的体系では捉えられない直観や意識及び文化的知識の重要性への注目と深く関わっている。つまり、実証主義、立証、客観性、西洋的推論といった、普遍性の真理によって支えられた諸原則が疑問視されてきている。例えば、Capra (1982, 1997, 2000)は、西洋で確立され、絶対的知識とされてきた

[5] IONSについては、学会の公式ホームページを参照。

[6] IONS参照。

[7] 例えば、Bauer (2001) と Hines (2003)の論ずるような、疑似科学と科学の違いについては認識している。

科学的理論や機械論的思考に基づいた世界観や価値観に疑問を投げかけ、東洋思想や新しい科学的理論を取り入れた世界観を提唱し、生態系や宇宙におけるつながりや全体的なしくみについて論じている。

また、フェミニズム理論は、科学・学術で自明とされた客観性と普遍性を問題視し、学術理論を構築した担い手の世界観・人間観の基礎となってきた男性中心的な枠組みを批判し、私的経験の持つ意味を浮き彫りにした（湯浅: 2003: 232-235）。さらに、フェミニズム理論は、近代諸科学における深層心理的な構造及び社会経済的背景をえぐり出し、技術と経済的効率性の権威によって権力を手にした近代科学を問題視し、白人男性中心的及び西欧中心的な発想が近代の諸文化圏にもたらした問題を鋭くついた。その結果、自明のこととされてきた西洋の男性中心主義的知識体系が疑問視され、知識構築の主体と対象について批判的な分析がなされるようになった。[8]

湯浅(2003: 232-235)は、西洋中心的発想により、自然は人間により管理され、ジェンダーの固定化が促進され、科学は合理性と経済的効率という権威のゆえに現実を定義する権力を手に入れた。科学への絶対的信頼は、「男性＝文明/文化・合理性・精神性」、それと対照的に「女性＝自然・非合理性・感覚性」という図式を定着化し、正当化した（湯浅: 234）と考えられる。このような二分化した思考は、すべての事象に対する捉え方にも反映されていると言えよう。ジェンダー研究は、女性を知識から排除することを問題視し、力関係と知識構築についての討論をするスペースを作り出した(Lather: 1984: 54; 1995: 292)が、知識構築における主体を問題視したことは、従来の知識構築における力関係について重要な疑問を投げかけた。さらに、フェミニズムにおける女性の連帯(sisterhood)は可能かという課題は、男女の二項対立のみの力関係ではなく、民族・文化・階級などの要素による多重な支配の関係と知識構築における力関係をも浮き彫りにした。

3．教育におけるスピリチュアリティ：

[8] 例えば、Hunter (2002)参照。

グローバル教育とホリスティック教育[9]

知識構築における支配・被支配の問題と近代科学批判について把握した上で、さらに教育において転換をはかろうとする最近の試みについて論じたい。中川(2007: 139-140)は、1970年代に「トランスパーソナル教育」においてトランスパーソナル心理学が初めて教育と結びつき、1980年代にホリスティック教育の中で受け継がれ、主流の教育とも結びつき、現在「教育におけるスピリチュアリティ」についての議論が盛んに行われていることを述べている。中川(2005: 46-53)は、ホリスティック教育の歴史とその流れを詳細に紹介しているが、その中で、ホリスティック教育において中心的役割を担ってきたロン・ミラー及びジョン・ミラーにとって、ホリスティック教育は多くの教育運動や思想動向と結びついたものであり、1970年代のヒューマン・ポテンシャル運動からの単なる派生ではないと論じている。ホリスティック教育は、モンテッソーリやシュタイナーの洞察・進歩主義教育の原理・ラディカルな社会批判・フリースクール運動の自由主義的な脈動(Miller: 1992: 21)などの多様な教育運動を結び付けていき、さらにグローバル教育、環境教育、先住民教育、オルタナティブ教育運動とも結びついて発展し、また、教育以外の、例えばニューサイエンスや東洋思想、トランスパーソナル心理学などの分野からの取り組みも行われている、と紹介している。

また、社会的背景として、物質主義、近代合理主義、人間中心主義などの近代的世界観・価値観による社会システムが現代社会の問題であるとされたこと、全体性、多元性、統合性、関係性、エコロジー、フェミニズムなどの概念がホリスティックな世界観の中で強調され(中川 : 2007: 49-50)たことがある。デカルトの機械論的生命観[10]や心身二元論への疑問視は、従来の知識構築の方法や現代思想及び事象や精神についての捉え方の根底を揺るがし、教育の分野

[9] 例えば、「ホリスティック(holistic)」な見方とは、分割された部分でなく、時間的にも空間的にも全体的に広い視点からみる見方を言う。その語源等については、日本ホリスティック教育協会(2005)参照。

[10] 例えば、福岡(2007: 3-8)参照。

にも影響を与えたといえる。

次に、スピリチュアル教育[11]と宗教教育の相違について明確にしたうえで、教育におけるスピリチュアリティの重要性について議論したい。宗教教育が特定の宗教を背景とし、教義や儀礼・道徳的行動規範、象徴体系、組織等を備えた制度的な信仰のシステムを意味し、それを教える教育形態であるのに対し、霊性（スピリチュアリティ）は、個人の内的体験を通した自己の存在様式の変容、それを導く修業プロセスであると中川(2005: 61, 63)は述べる。それは、自己探求を通して、自己の存在次元を深め、魂の覚醒へと至るプロセスであり、必ずしも宗教教育を媒介としなくても体験され、個人の内なる次元で体験するトランスパーソナルな存在次元であることを論述している（前掲）。[12]

高等教育においても、スピリチュアリティの重要性が注目され、単なる知識やスキル習得に留まらない教育を行う重要性が指摘されてきている。Spies (2000: 27)は、知性と感情、そしてスピリチュアリティのバランスの必要を提言し、人生における状況理解能力、実際的な事柄を成就するのに適切なスキル、そして個人が切望するもの(aspiration)と社会全体が切望するものとのバランスの重要性を説いている。ホリスティックな世界観やつながりの重要性が議論される現状の中、近年盛んになってきた異文化理解やグローバル教育においても、ホリスティックな視点が取り上げられているのは当然と言えよう。Miller (2005: 2) は、ホリスティック教育とは、知的、感情的、身体的、社会的、美的、精神的なすべての側面を含めた人間としての全体像を育てる試みであるとし、ホリスティック教育を定義づける要因は前進的な教育で無視されがちであった「スピリチュアル」('spiritual')であることだと述べる。

ホリスティック教育は、単なるテクニックやイデオロギーに終始せず、究極的には、教師と学生の心(hearts and minds)に焦点をあてる。教育はこれまで'Head'[13]に焦点をあて、人としてのその他の部分を排除する傾向にあったが、ホリスティック教育は、もっと広い視野から捉えた学習を提供することを試みる。Miller (2001)は、教育において、合理性や個人的競争に焦点をあててきたことにより、直観力を養うことや学習における協力などを軽視してきた傾向があることについて警告を発している。つまり、ホリスティック教育では、教育のプロセスの「全体性」(wholeness)の大切さを説き、人間の知的及び技能的な側面だけでなく、身体的、社会的、道徳的、美的、創造的側面を重視し、命や宇宙の神秘も視野に入れる(GATE: 2005: 91)。ホリスティックなパラダイムでは、各分野で展開する理論、研究、実践が、相互に関連しあっていると捉え、宇宙の全体としてのまとまりとすべての存在のつながりを根底におく(GATE: 2005: 96)。さらに、ホリスティック教育では、人間と社会、自然環境や宇宙との不可分なつながり、その内面におけるスピリチュアルな次元とのつながりを重視することから、「エコロジカル」・「グローバル」・「スピリチュアル」といった形容で表現される（中川:2005: 33)。

ここで、ホリスティック教育とグローバル教育との関連について整理しておきたい。現在、グローバル教育・国際理解教育（国際教育）[14]が、実際に学校にも取り入れられるようになったが、個人と世界とのつながりを認識し、国際社会で生きていくためには不可欠であると言えよう。Cogan(1998: 106-107)は、今後大学の国際化を進めるには、学生と職員が学内のみでなく、より広く世界と連携し協力していく必要があると述べる。魚住(2003: 56-57)は、グローバル教育及び国際理解教育の概念の定義について、異なる方向性を示している。1)国際理解教育は、主権国家の集合体としての国際社会を前提に他国理解

[11] 例えば、中川(2005: 15)は、スピリチュアリティを「霊性」と訳している。この訳語にそって、'spiritual education'を「霊性教育」という用語で表現することも多い。「霊」という文字使用による誤解への懸念については西平(2007)参照。

[12] 他に、Dalton (2001, 18), Tisdell (2003: 29), Lerner (2000)を参照。

[13] 'Head'は、「頭脳、理性、分別」という意味を持つ(小西・南出・大修館: 2001-2002)。

[14] 米国の場合、グローバル教育と国際理解教育（国際教育）は、'global education or international education'、又は、'international and global education'のように使用され、厳密に区別されないと魚住(2003: 54)は指摘している。

や異文化理解、国際関係理解などの学習を通じて、諸国民・諸国家間の平和、友好、協力及び人権の国際的保障を目指す教育である、2)グローバル教育は、グローバル化し相互依存性を増しつつある世界を前にして、グローバルな見方やグローバルな価値の実現を重視して意思決定し、時に国家・民族を越えて行動の出来るグローバル市民性(global citizenship)の育成を目指すこと。

同様に、「日本的特殊性」と「地球的普遍性」をどう捉え、どう統合を図っていくかは、グローバル教育のあり方について再検討する機会を与えてくれる。魚住(2003: 35-36)は、日本文化をしっかり見につけ、民族の誇りをもつことへの強調が、狭義での「国家主義」や「日本主義」を招き、独善性や排他性とつながる伝統を尊重する自覚につながる危険性を指摘している。狭い自国の利害のみで判断せず、国際的、地球的、人類的視野での人格形成を目指すために、「日本的特殊性」と「地球的普遍性」の統合を目指した教育の実現を図る必要があると説く。

注意すべきは、グローバル教育は、相互依存性や文化の多様性を理解して共存・共生する道を探りながらも、文化間の違いや枠組みを強調する中で普遍的価値やより深い部分での人と人とのつながりを軽視しがちである点である。Johnson (1986) が、アメリカのグローバル教育が、科学の優越性や機能的有用性、合理主義、進歩主義などの価値観を反映していることを批評している(魚住: 40)ように、その危険性を指摘しておきたい。中川 (2005: 34-36)は、Selby(2002: 82-83)の論じる、グローバル教育の外向きの活動の傾向と内面性への視点の不足について述べ、グローバル教育へのホリスティック教育からの実践方法の導入の重要性について紹介しているが、ここでスピリチュアリティ研究から学ぶ点は多い。

スピリチュアリティの重要性の研究は、「グローバル」「エコロジカル」と関連して、教育の分野も含め、スピリチュアリティとは無関係と思いがちなビジネス、マネージメント、経済の分野において進められている。[15] エコロジーの考え方は、グローバル教育（地球市民教育）の出発点でもあり(GATE: 2005: 102)、それは人間の生活と文化及び自然との深い結びつきでもある。地球の生命システムのなかで、各自が地球全体のエコロジーを考え、自分の役割に気づくことが大切であり、それを専門分野の枠を超えた学際的研究や、創造的経験、内省を深める体験などを通して学ばなければならない(前掲)。つまり、人間の生活も調和した生態系の一部であることの認識が、グローバル教育の基礎となるとも言える。

4．結論

最後にスピリチュアリティの研究からのグローバル教育への示唆についてまとめておく。経済の成長よりも人間としての成長が最優先であるというGATE(2005: 91)の主張は教育の原点を考えさせてくれる。近代の公教育が、国民の生産性をあげるために組織される傾向にあり、UCLA の調査で示したように[16]、「教育が最も大切にすべき根本的な目的は、人間が生まれながらにしてもっている成長の可能性をはぐくむことでなければならない」(前掲)ことへの理解と実践が十分でなかったことが懸念される。本稿で取り上げた科学も含めた多分野におけるスピリチュアリティの研究の発展を目の当たりにした時、地球や宇宙の一部として生存している人間の存在と世界とのつながりの大切さについて、広い視野から再考する試みが多面的に行われていることに気付く。目に見える利益を追及する環境の中で、人々は生きることの意味を捜し求めているとさえ映る。

グローバル教育において目指すべきことの一つは、一人一人が、部分的な狭い自国文化の枠組みを超えて世界の広い視野から自分自身と世界を見られる目を養うことではないか。宇宙におけるすべてのつながりの中で自分が生きていることを、学生自身が生きた教育の中で学び取れる機会を提供し、地球市民として生きることの意味を学んでいくのがグローバル教育の根本ではないか。

本稿において、スピリチュアリティの研究の発展の現状についてまとめ、今一度「生命」・「心」・「知

[15] 詳細は、例えば、Eisler (2007)参照。

[16] P.1 を参照。

識」について再考することにより、グローバル社会における教育の意味について探ってみた。「グローバル教育」という枠組みを越えて、人々が宇宙のつながりの中で生きていることを確信し、生への畏敬の念を持って生きていくことを支援するためにも、多分野におけるスピリチュアリティの研究が今後も貢献するところは大きい。

参考文献

[1]Astin, Alexander W., H. S. Astin, Jennifer A. Lindholm, and Alyssa N. Bryant, Spirituality in Higher Education: A National Study of College Students' Beliefs and Values (Los Angeles: Higher Education Research Institute, UCLA, 2005).

[2]Belenky, Mary Field, Blythe McVicker Clinchy, Nancy Rule Goldberger and Jill Mattuck Tarule, *Women's Ways of Knowing*. New York: Basic Books, 1986.

[3]Bentz, Valerie M. and Jeremy Shapiro, *Mindful Inquiry in Social Research*. Thousand Oaks, London, and New Delhi: SAGE Publications, 1998.

[4]Bauer, Henry H., *Science or Pseudoscience: Magnetic Healing, Psychic Phenomena, and Other Heterodoxies*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2001.

[5]Capra, Fritjof, *The Tao of Physics: An Exploration of the Parallels between Modern Physics and Eastern Mysticism 25th Anniversaty Edition, Fourth Edition, Updated.* Boston: Shambhala, 2000.

[6]Capra, Fritjof, *The Web of Life: A New Scientific Understanding of Living Systems.* The United States: Anchor Books, 1997.

[7]Capra, Fritjof, *The Turning Point: Science, Society, and the Rising Culture*. Toronto, New York, London, Sydney, Auckland: Bantam Books, 1982.

[8]Cogan, John J., 'Internationalizing through networking and curricular infusion', in Mestenhauser, Josef A. and Brenda J. Ellingboe (eds.), *Reforming the Higher Education Curriculum: Internationalizing the Campus.* Phoenix, Arizona: American Council on Education and the Oryx Press, 1998, 106-117.

[9]Dalton, Jon C., 'Career and calling: Finding a place for the spirit in work and community', *New Directions for Student Services*, 95 Fall (2001): 17-25.

[10]De Souza, Marian, 'Contemporary influences on the spirituality of young people: Implications for education', *International Journal of Children's Spirituality*, 8 (11) (2003): 269-279.

[11]Eisler, Riane, *The Real Wealth of Nations: Creating a Caring Economics.* San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc, 2007.

[12]Harris, Maria and Gabriel Moran, *Reshaping Religious Education*. Louisville, KY: Westminster John Knox Press, 1998.

[13]Higher Education Research Institute: Graduate School of Education & Information Studies, University of California, Los Angeles (UCLA), *Spiritual Life of College Students: A National Study of College Students' Search for Meaning and Purpose*, 2003. Retrieved February 14th, 2007, from www.spirituality.ucla.edu.

[14]Hines, Terence, *Pseudoscience and the Paranormal, Second Edition*. Amherst, New York: Prometheus Books, 2003.

[15]Hunter, Margaret, 'Decentering the white and male standpoints in race and ethnicity courses', in Macdonald, Amie A. and Susan Sanchez-Casal (eds), *Twenty-first-century Feminist Classrooms: Pedagogies of Identity and Difference.* New York: Palgrave Macmillan, 2002, 251-279.

[16]The Institute of Noetic Sciences (IONS) (2007). Retrieved August 15th, 2007, http://www.noetic.org/

[17] Johnson, Donald, 'Global education and its view of the world: Cultural particularism and global universalism', *Aichi Kyôiku Daigaku Shakaika Gakkai, Shakaikagakuronshŭ*, 26 (1986): 201-218.

[18]Kafatos, Menas, 'From Structural Science to Integrative Science', Reception Speech at the Academy of Scientists of Romania, Bucharest, June 23, 2000.

[19]Kafatos, Menas and Mihai Draganescu, 'Toward an Integrative Science', Retrieved October 1st, 2007, http://www.racai.ro/~dragam/TOWARD_1.HTM

[20]Lather, Patti, 'Feminist perspectives on empowering research methodologies', in Holland, Janet and Maud Blair with Sue Sheldon (eds), *Debates and Issues in Feminist Research and Pedagogy*. Clevedon, Philadelphia and Adelaide: Multilingual Matters Ltd. In association with the Open University, 1995, 292-307.

[21]Lather, Patti, 'Critical theory, curricular transformation and feminist mainstreaming', *Journal of Education* 166:1 (1984): 49-62.

[22]Lerner, M., *Spirit Matters*. Charlottesville, VA: Hampton

Roads, 2000.
[23]Lindholm, Jennifer A. and Helen S. Astin, 'Understanding the "interior" life of faculty: How important is spirituality?', *Religion & Education*, 33(2) Spring(2006): 1-26.
[24]Miller, John P., 'Introduction: holistic learning', in John P. Miller, Selia Karsten, Diana Denton, Deborah Orr and Isabella Colalillo Kates (eds), *Holistic Learning and Spirituality in Education: Breaking New Ground*. New York: State University of New York Press, 2005, 1-6.
[25]Miller, John, *The Holistic Curriculum*. Toronto, ON: OISE Press, 2001.
[26] Miller, Ron, 'Defining a common vision: The holistic education movement in the U.S.', *Orbit, Special Issue: Holistic Education in Practice*, 23 (2) (1992): 20-21.
[27]Nadeau, Robert and Menas Kafatos, *The Non-local Universe: The New Physics and Matters of the Mind*. New York: Oxford University Press, 1999.
[28]Palmer, Parker J., *The Courage to Teach*. San Francisco: Jossey-Bass, 1998.
[29]Rose, Steven, 'Brains, minds and the world', in Steven Rose (ed), *From Brain to Consciousness? Essays on the New Science of the Mind*. London: Princeton University Press, 1999, 1-18.
[30]Selby, David, 'The signature of the whole', in Sullivan, Edmund O' et al. (eds), *Expanding the Boundaries of Transformative Learning: Essays on Theory and Praxis*. New York: Palgrave Macmillan, 2002.
[31]Spies, Philip, 'University traditions and the challenge of global transformation', in Inayatullah, Sohail and Jennifer Gidley (eds), *The University in Transformation: Global Perspectives on the Futures of the University*. Westport, Connecticut and London: Bergin & Garvey, 2000, 19-29.
[32]Tisdell, Elizabeth J., *Exploring Spirituality and Culture in Adult and Higher Education*. San Fransisco: Josey-Bass, 2003.
[33]Wheatley, J. Margaret, *Leadership and the New Science: Discovering Order in a Chaotic World, Third Edition*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers, Inc, 2006.
[34] 石川幹人・渡辺恒夫　「間奏曲　対談：ツーソン会議と東京'99」足立自朗・渡辺恒夫・月本洋・石川幹人編『心とは何か -心理学と諸科学との対話 -』北大路書房, 2001, pp.73-83.
[35] 魚住忠久　『グローバル教育の新地平』黎明書房, 2003.
[36] 大宮司信・村田和香　「精神医学とスピリチュアリティ」湯浅泰雄 監修『スピリチュアリティの現在 -宗教・倫理・心理の観点-』人文書院, 2003, pp.160-186.
[37] GATE(Global Alliance Transforming Education)　「第六章　ホリスティック教育ビジョン宣言」日本ホリスティック教育協会編『ホリスティック教育入門 -復刻・増補版-』せせらぎ出版, 2005, pp.89-109.
[38] 小西友七・南出康世　『ジーニアス英和大辞典』大修館書店, 2001-2002.
[39] ダグラス・L・モーガン「第二章　収奪・認知・受容 -高等教育における先住民の知恵と知識-」マーク・ブレイ 編, 監訳 馬越徹・大塚豊『比較教育学 -伝統・挑戦・新しいパラダイムを求めて-』[Mark Bray, ed. Comparative Education: Continuing Traditions, New Challenges, and New Paradigms] 東信堂, 2005, pp.49-68.
[40] 苫米地英人　『スピリチュアリズム』にんげん出版, 2007.
[41] 中川吉晴　「『教育におけるスピリチュアリティ』について」安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学 -心の時代の学問を求めて-』せせらぎ出版, 2007, pp.139-164.
[42] 中川吉晴　『ホリスティック臨床教育学 -教育・心理療法・スピリチュアリティ-』せせらぎ出版, 2005.
[43] 西平直　「スピリチュアリティ再考」安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学 -心の時代の学問を求めて-』せせらぎ出版, 2007, pp.71-90.
[44] 日本ホリスティック教育協会編　『ホリスティック教育入門 -復刻・増補版-』せせらぎ出版, 2005.
[45] 福岡伸一　『生物と無生物のあいだ』講談社, 2007.
[46] 堀江宗正　「日本のスピリチュアリティ言説の状況」安藤治・湯浅泰雄編『スピリチュアリティの心理学 -心の時代の学問を求めて-』せせらぎ出版, 2007, pp.35-54.
[47] 湯浅泰雄　『スピリチュアリティの現在 -宗教・倫理・心理の観点-』人文書院, 2003.

謝辞

2006 年度広島大学学長裁量経費により、2007 年 8 月 8-12 日にアメリカの Palm Springs で行われた IONS 学会への参加が可能となった。本稿にて広島大学学長への感謝の意を表させていただきたい。